

初夢

初夢を見た。妙にリアルな夢だった。

建物の雰囲気から察すると、どうも駒場のキャンパスらしい。銀杏並木を歩いている女子学生がとても多い。目に入る学生の半分くらいはそうだ。東大の学部ではたしか二割くらいしか女性はいないはずなのに。そうか、何かイベントがあつて、ほかの大学の女子学生がたくさん来ているのか、と納得した。それにしても、授業開始の時間になるとみんな教室に吸い込まれていく。とても不思議な光景を見た気がした。

正門の周辺には、新入生クラブ勧誘の立て看板が所狭しと並んでいる。新入生を迎える恒例の風景である。そういうえば、さきほど教室に入っていた学生たちも、まだキャンパスに慣れないぎこちなさがあつた。でも何かまわりの様子が変だ。新学期、木々の芽吹き、季節のはずなのに、立て看板を覆う木の葉がずいぶん繁っている。陽射しもどうも春の陽光ではない。秋のはじまりの空気だ。空も高い。

昼休みになつたらしい。久しぶりに学食でランチを食べている。学生たちの会話がイヤでも耳に入ってくる。「俺のロッジは……」「いや俺のロッジよりいいよ」「ロッジに面白い子がいて……」、そこかこのテールが、「ロッジ」という話で盛り上がっている。何やら新しい経験に、みな興奮しているようだ。「私のロッジは自宅のすぐ近く」という声も聞こえてきた。どうも新入生は、全員が寮に入ることになっているらしい。

銀杏並木に戻つた。銀杏並木なのだけれども、何か雰囲気が違う。道幅が広い。そうだ、これは本郷キャンパスの正門から安田講堂へ続く銀杏並木だ。ちょうど授業が終わつたようで、たくさん学生が建物から出てくる。そこかしこから、「やあ、久しぶり」という大きな声が聞こえてくる。まあ新学期で久しぶりならんだらうけど、そんなに大げさに言わなくても、と思う。でも雰囲気はやけにインターナショナルだ。「イェール」「パークレイ」「オックスフォード」「ペキン」「ソウル」「ミュンヘン」など、海外の大学の名前が競うように飛び交っている。学生たちはそれぞれ、その大学に留学して戻ってきたばかりらしい。「私はここに来年行く予定」といった声も聞こえる。みんな留学するのが当たり前になつてきているようだ。

とにかく学生は元気で賑やかだ。少し圧倒される思いがして、遠慮がちに建物脇を歩いていると、アーケードの掲示板に鮮やかな文字のポスターが貼つてあるのが目に入った。「一兆円基金達成！」と大きな文字が躍っている。わが目を疑つた。どうやら、たくさんの人たちの支援と努力のおかげで、アメリカの大学に匹敵するような基金が東大でも育つたらしい。この基金のおかげで、年間五〇〇億円の運用益が確保できて、きめ細かな少人数教育、留学や生活支援の奨学金、基礎研究や萌芽研究の支援、若手教員のポスト確保、老朽建物の改修整備などが着実にすすめられている、と説明がついている。

嬉しさと驚きの入り混じつた気持ちでポスターに見入っていると、後ろから声をかけられた。たしか職員採用試験の折に面接をした女性で、能力があるんだからもっと自信をもつといいよと励ました職員だが、すっかり賞禄ができています。いま、財務担当の理事をしていると。その脇に立っているのは、以前にゼミに出席していた学生だったはずだ。いまは教授で、この理事の補佐をしながらも、教育研究をしっかりとやる時間がとれていますと、自信たっぷりである。

国立大学法人化前後から今日に至るまで、東京大学の教員・職員は、業務量の増大、研究資金獲得競争、国際化をはじめとする新しい課題への対応など、日々の仕事に追われ疲れきつてきた。それでも、学生を大事に育てながら自らもよい研究をしていこう、教育研究の環境をよくしていこうと、一生懸命にやっている。大学というのは、人材育成にしても研究開発にしても、「未来」「明日」に対して大きな責任をもつ組織である。そうした組織の人間が日々の仕事に疲れて夢を見られなくなるのでは困る。そもそも学問は、夢が原点でありドライブである。教職員や学生、そして知を大切に思い支える多くの人々が手を携えあつていく、大きな夢を見続けたい。

楽しい初夢だった。夢の続きはまだあつたように思う。少しずつ思い出していくだろう。